

辺野古の埋立てを止めよう！

3月25日(金)に「辺野古の埋立てを止めよう！～沖縄と神奈川を結ぶ集会～」が関内ホールで開かれました。開場を待って、かなりの人たちが並び、会場はいっぱいになり、立ち見の参加者も出るほどの盛況でした。内容はさることながら、大勢の人々は山城博治さんに会いたい！という気持ちが大きかったです。

美しいサンゴやジュゴンが生息している海に、大量の土砂を入れて埋立て、戦闘機の離着陸ができる滑走路を作る、頭上には爆音、水源、土壌の汚染に怯え、生活が破壊される、という事態が辺野古に始まる。自然に溶け込み、自然を友として生きてきた日本人には、考えられない話です。まして、戦場になり、大地が形を変えるほど砲撃を受け、多くの命が奪われ、涙を流し続けた沖縄県人にとって、二重、三重にもなる苦しい、耐えがたい話です。なぜ沖縄なのか、それは、原発設置場所と同じ論理です。「危険なものは地方へ、僻地へ、貧乏人には金をやっておけば良い」という本土の、身勝手さがまずあります。沖縄と本土の基地問題についての温度差とよく言われますが、それ以上に、本土の人々の無関心、冷酷さが大きいと私は思っています。

最初にフリーのジャーナリスト(元毎日新聞、沖縄タイムスの記者)の渡辺豪氏が講演されました。防衛省の記録から、日本がアメリカへ従属してきた歴史を見る必要があること、それを沖縄に押し付けている本土との断絶の構図、さらに尖閣諸島問題で危機感をあおり、自衛隊を南西にシフトしてきた現在の安倍政権批判を、誠実な口調で訥々と語られました。



次の講演者は山城氏。直近にあった、「辺野古訴訟」の和解をとりあえずは喜び、細部の条項への懸念を持ちつつも、愛する沖縄を軍事に引きずり込まれないように「必ずこの戦いに勝つ」という希望と信念をもって、翁長県知事を信じ、米軍のシュワブ・ゲートで埋立て工事の作業をさせないよう、身を挺して抵抗運動を指導しておられます。

辺野古での運動は徹底的な非暴力、不服従を貫いています。老人、女性など、高齢者が多いのですが、全国各地からも参加者が駆けつけています。けれども、屈強な県警や機動隊の若者によって、次々と引きずり出され、追立てられます。決してめげずに何度でも座り込む。それがだめなら、道の真ん中に寝るといことで反対を表明しています。山城氏は運動する一人ひとりを大きな声で励まし、朗らかに笑い、時にはあらん限りの大声で県警、警視庁の機動隊を叱る。また、三線に合わせて歌い、踊るとい、自由闊達なパフォーマンスを自在に繰り出す、パワフルなリーダーです。最近、米兵の暴行事件が起きました。警察が守っているのは市民なのか、米軍なのか。謝罪を口にしながらも、実効性のない米軍の対応、また、政府の無視。むごたらしい事件が繰り返され、怒り狂います。過去の身近な例を重ね合わせ、山城氏は胸が詰まって、こぼれる涙をぬぐいながらも、訴えます。彼の全身に沖縄を愛する熱い思いが流れていて、魂が叫んでいます。

平和で豊かな自然の島「沖縄」であってほしい、武力によって平和は守れない、という思いを沖縄だけに委ねるのではなく、私たちは各地で、様々な活動で、連帯し、叶えていきたいです。